

現在、世間の重要トピックスの一つになっている高松塚古墳。その保存対策検討委員会の委員を務めるなど、文化財の保護に広く携わっているのが、今回お話を伺った百橋明穂先生だ。どのような心構えで、研究活動に取り組んでいるのか。ご自身の研究内容などとあわせて語ってもらった。

現場の体験が今の私をつくった

先生は、どんな学問分野を専攻されていたのですか。

専門は美術史学です。学生時代は、特に日本とアジアの古い絵画史を、奈良の国立文化財研究所と博物館で勤務して以降は、仏教絵画史を中心に研究していました。

神戸大学で働き始めてからしばらくして、奈良の昔の仲間から電話がありました。古代の壁画が発掘出土したので、調査に来てほしいという依頼でした。

それ以降、日本国内の寺院の壁画、高松塚やキトラの古墳壁画、さらには中国の壁画に携わることになりました。この分野の研究者は多くありません。そのため、古代の壁画関係のことは、次々と私のもとに調査依頼が来ました。

現場で学ぶ場を与えられていたことは、本当にありがたかったです。私がいきなり大学の教員になっていたら、おそらく今の私はなかったでしょう。現場を知らず、文献ばかりいじっているのは、現場から相手してもらえません。

今の私は、現場に行っていたからあるのです。その意味で、現場で学ぶという出会いを与えてくれた人間関係は、非常に大事だと感じています。

先生の専門研究の魅力を教えてください。

高松塚古墳・保存対策検討委員会委員

文学部教授 **百橋 明穂** 先生

先生 人柄発見



どのはし・あきお

1974年東京大学大学院修士課程修了、同年奈良国立文化財研究所に就職。奈良国立博物館に転任後、81年本学文学部助教授に。95年同教授に昇任し、現在に至る。専門は日本・東洋美術史など。文部省在外研究員で、文化財に関するさまざまな調査委員、審議会委員を務めている。

美術は非言語の文化

文学部での研究対象は、やはり文字が中心です。しかし私の場合、相手は美術。非文字文化です。はじめはどう取りかかっていたかわからなかったのですが、だからこそおもしろいと思いました。

奈良や東京、時には外国まで、美術館やお寺を見に回りました。美術作品を見て、4W1Hをはじめ、どんな意図が込められたのかなど、作品に込められた真実を探るのです。

非言語と聞くと、抽象的で難しく思うのですが、非言語だからこそ簡単とも言えます。形から形で伝

文化財保護は、先人の努力の結果

えることができるのです。例えば仏像なら、インドから、中国、韓国、日本と、言葉の壁があっても、造形物の形そのもので伝えることができます。そこには、言葉が介在しなくてよいのです。

その昔、浮世絵が、日本語を知るはずもないフランス

の画家に、大きな影響を与えたことがありました。このような例は、いくつでも挙げることができます。

絵画の中の人物が手を挙げていたり意味、手に持っているものの意味など、それらを分析することを、一般の皆さんは難しいと思われるようですが、実は意外と簡単です。あらゆる作品を地域や時代ごとに見比べ、傾向を見出すことができれば、あとは当てはめればよいのです。

しかし、絵に表れない、もつと奥深い部分を探るには、相当な感性が必要です。それには、本当にいい作品をじっくり眺め、長年にわたる経験を積むことが必要です。

感性に完成はないですが、「だからこそいい」と言え

く、ファッションや音楽にも通じることです。私も、フランス語を話せなくても、フランス製のネクタイをします。「いいものはいい」と、誰とでも分かり合えるのが魅力です。国際交流が一番しやすい分野でもあります。

創造は、模倣から始まります。どんな偉大な画家でも、名画の模写で訓練を重ね、やっと個性を出せるようになるものです。過去の作品があつて今がある。そこに歴史の関わりがあります。その関わりを説き明かしていくのが、美術史学の喜びです。

研究を進めていくと、地域や国家間でさまざまな交流があり、その変化が広がっていくことがわかります。また、日本は江戸時代に鎖国体制をとっていました

が、伊万里焼などの焼き物はヨーロッパに輸出されていました。芸術は、言語だけでなく、政治にも左右されたいと言えます。

国民は、自国の文化に自覚と誇りを

先生は、社会活動に積極的に参加されていますね。特に、文化財関係が多いです。文化財はこの世に一つしかない、大変貴重なものです。中には、千年以上続いてきたものもあります。日本だけでなく、世界の財産でもあります。

守り、伝え続けるのは、簡単なことではありません。それを、先人たちが大変な努力を重ね、大事に大事に今日まで受け継いできたのは、ものすごいことです。美術作品もいつか滅びるものではありますが、何があつても後世に伝えたいと思いませんか。

これは民族や国の文化、アイデンティティにつながるものでもあります。

今高松塚古墳などの件をはじめ、行政だけでは完璧な対応ができていないことがわかります。だからこそ国民が、「自分たちの文化だ」と自覚と誇りを持ち、見守る必要があります。

その上で、世界の文化を受け入れる寛容さが必要で、ナショナルイズムが目立つ現代ですが、互いの文化を認め合い、保護し合わないといけません。それこそが、文化交流なのです。

私の使命は、研究によって文化財の価値をわかりやすく世間に伝えること。そして、文化財を保護し、活用することです。

まず行動、そして積極的な提言を

学生にメッセージをお願いします。

最近読んだ本の中で、「二万年の旅路」という、ネイティブ・アメリカンの口承史を訳したものが印象的でした。

その中に「どの火のまわりでも、最年少者の意見に喜んで耳をかすような一族になろう」という一文があります。将来に一番責任を持ち、一つ一つの決定と一番長く付き合っていくのは若者です。日本が、その若者の意見に耳を貸す社会になってほしいと思います。

逆に言えば、若者にもっと意見を言ってもらいたいのです。

別の個所には、「時として知恵は大きな愚かさの後に、はじめてやってくるもの」とあります。愚かだと思ふことでも、やってみて初めてわかることがあります。どんな経験や出会いがあるかわかりません。

失敗しても、そこから学ばなければいけません。既存概念や権威に縛られず、何事にも恐れず、まず行動してもらいたいと思います。そして、若い人にどんどん意見を出してもらいたいですね。